

## 日本における「ヘンゼルとグレーテル」の受容—平成期を中心に—

### Reception of 'Hansel and Gretel' in Japan: Focusing on the Heisei Era

小泉直美

KOIZUMI Naomi

#### 要旨

平成期(1989-2019)の「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳は現在 106 話確認している。それらを分析すると、収録されている形態に変化が生じていることが判明する。昭和期には児童向け雑誌に多く収録されていたものが、平成期には雑誌での収録は激減し、読み聞かせ物語集への収録が増える。そこでは話が短縮され、子どもたちが鴨(家鴨)に救助される場面では、グレーテルの的確な判断を示す言葉が削除されている。女の子の賢さが描かれていないのである。一方、話は短縮されても「お菓子の家」は昭和期よりも華やかに描かれ強調されている。あたかもこの話は「お菓子の家」の話であるかのように、視覚的表現で読者に印象づけているのである。また原典では子どもたちが帰宅したとき母親は死亡しているが、平成期には「家出する」「実家に戻る」「父親に追い出される」という表現が出現する。子どもと両親との関係だけでなく、夫婦の在り方が児童書の中に組み入れられているのである。さらにパロディ版も出現する。平成期は昭和期からの読書推進活動が実を結んだ時代である。さまざまな方法で読書への興味を持たせようとしたことが読み取れる。

#### Abstract

In the Heisei era (1989-2019), there are currently 106 Japanese translations of Hansel and Gretel. The form in which they are recorded has changed. In the Showa era, many were included in children's magazines. However, in the Heisei era, this number declined sharply and those included in read-aloud story collections increased. In such collections, these are shortened and, in the scene where the children are rescued by the duck, the words that indicate Gretel's precise judgement are deleted; her cleverness is not depicted. Although the story is shortened, the 'House of Sweets' is depicted more glamorously and emphasised than in the Showa era. The visual representation impresses the reader, redirecting the focus, as if the story is about a 'House of Sweets'. In the original story, the mother dies when the children return home, but in the Heisei era, other expressions, including 'running away from home', 'returning to the family home', and 'being kicked out by the father' appear. Both the relationship between the children and their parents and the existence of married couples are incorporated into children's books. Parody versions have also appeared. In the Heisei era, reading promotion activities from the Showa era have developed. Various methods have been employed to try to create or raise interest in reading.

#### Key Words

「ヘンゼルとグレーテル」、グリム童話、平成期、日本での受容、読書推進活動  
Hansel and Gretel, Grimm's Fairy Tales, Heisei-Era, Reception in Japan, Reading Promotion Activities

はじめに

「ヘンゼルとグレーテル」の最初の邦訳は、1901(明治 34)年に東海生が訳した「一太郎とおすみ」(『日本之小學教師』所収)である。その後 121 年経つ現在、「ヘンゼルとグレーテル」の話は途切れることなく紹介され続けている。邦訳数は明治期 10 話、大正期 20 話、昭和期 138 話存在し<sup>1</sup>、平成期においては現在 106 話確認している。平成期に焦点を当てた「ヘンゼルとグレーテル」の包括的な先行研究は存在しない。本稿では、平成期(1989 年 1 月 8 日-2019 年 4 月 30 日)に出版された「ヘンゼルとグレーテル」の邦訳の改変点について、収録されている出版形態別に考察をしていく。なお、調査対象としているのは紙媒体のみである。

## 1. 平成期に出版された「ヘンゼルとグレーテル」

### 1) 概観

平成期の「ヘンゼルとグレーテル」の話は 106 話存在する。その詳細は文末に資料として記載する。これらについては特筆すべき点が 2 つある。1 つ目は話が収録されている出版形態の変化である。昭和期には児童向け雑誌に多く収録されていたが、平成期には雑誌への収録が減少し、読み聞かせ物語集への収録が増える。それらは話が大幅に短縮される傾向がある。たとえば子捨てが 1 回であったり、魔女が 2 人を歓待する場面が簡略化されていたり、救助してくれる鴨に対してグレーテルの「重すぎるからひとりずつ渡して」という言葉が省略されていたりすることが挙げられる。2 つ目は新しい表現が出現することである。子どもたちが魔女の家から無事帰宅したとき、原典では母親は死亡しているのに、「家出する」「実家に戻る」「父親に追い出される」という話が登場する。これは昭和期以前の邦訳には見あたらない改変である。以上の 2 点が平成期の大きな特徴といえる。

### 2) 出版形態の種類と概念規定について

106 話について分析と考察をする前に、収録されている出版形態の種類を以下のように定めておく。種類は、絵本、絵物語集、文字が主体の単行本、読み聞かせ物語集、漫画本、雑誌、紙芝居の 7 つに区分する。絵本は、「ヘンゼルとグレーテル」単体のものと、もう 1 話他の話を収め、タイトルに「ヘンゼルとグレーテル」と記載されているものを指す。絵物語集は、絵が多く複数の話を収録しているが、「読み聞かせ」と記載されていないものを対象としている。文字が主体の単行本は、文字が主体で複数の話を収録し、絵が挿絵程度添えられたものである。読み聞かせ物語集は、数多くの話が短縮されて収録されており、大人が子どもに読み聞かせるために作られた本を指す。タイトルや解説に「読み聞かせ」と表示され、「読み聞かせお話集」や「読み聞かせ絵本」と記載されているものを含める。漫画本と雑誌と紙芝居は子ども向けのものである。

### 3) 出版形態別話数の一覧表

これら 7 つの形態による邦訳数を 1989 年から 2019 年までの 1 年ごとに分けて【表 1】のように比較してみた。

【表 1】 出版形態の種類による話数(割合)比較

出版年	絵本	絵物語集	文字が主体の 単行本	読み聞かせ 物語集	漫画本	雑誌	紙芝居
1989(8話)	4話(14%)	1話(10%)	1話(4%)	2話(5%)			
1990(0話)							
1991(1話)			1話(4%)				
1992(2話)						1話(50%)	1話(50%)
1993(2話)	2話(7%)						
1994(3話)	1話(3%)		1話(4%)				1話(50%)
1995(2話)	1話(3%)			1話(3%)			
1996(4話)	2話(7%)	1話(10%)		1話(3%)			
1997(3話)	2話(7%)		1話(4%)				
1998(2話)	1話(3%)					1話(50%)	
1999(6話)	1話(3%)	1話(10%)	4話(17%)				
2000(4話)			3話(13%)	1話(3%)			
2001(4話)	1話(3%)		3話(13%)				
2002(4話)			1話(4%)	2話(5%)	1話(100%)		
2003(1話)				1話(3%)			
2004(5話)	1話(3%)	1話(10%)	2話(8%)	1話(3%)			
2005(3話)				3話(8%)			
2006(1話)	1話(3%)						
2007(2話)	1話(3%)			1話(3%)			
2008(0話)							
2009(4話)	3話(10%)			1話(3%)			
2010(6話)	2話(7%)		1話(4%)	3話(8%)			
2011(6話)	1話(3%)			5話(13%)			
2012(4話)		1話(10%)	1話(4%)	2話(5%)			
2013(6話)	2話(7%)	1話(10%)	3話(13%)				
2014(4話)	1話(3%)			3話(8%)			
2015(6話)				6話(16%)			
2016(3話)		1話(10%)	1話(4%)	1話(3%)			
2017(4話)	1話(3%)		1話(4%)	2話(5%)			
2018(4話)	1話(3%)	2話(20%)		1話(3%)			
2019(2話)		1話(10%)		1話(3%)			
計106話	29話(27%)	10話(10%)	24話(23%)	38話(36%)	1話(1%)	2話(2%)	2話(2%)

## (1) 【表 1】 の分析

1990(平成 2)年と 2008(平成 20)年は「ヘンゼルとグレーテル」の出版物は見あたらない。したがって【表 1】は、1990年と 2008年を除いた集計結果となる。【表 1】では、絵本はほぼ出版され続けている。平成期後半は、絵物語集が増え、文字が主体の単行本が減少傾向にある。読み聞かせ物語集は 2002(平成 14)年以降多く出版されている。漫画本は 2002(平成 14)年に 1冊出版されているだけである。雑誌と紙芝居は平成期前半にのみ出版されている。

## (2) 【表 1】の考察

平成期について述べるには、昭和期の傾向を述べる必要がある。昭和期は 138 話中、絵本が 43 話 (31%)、絵物語集が 10 話 (7%)、文字が主体の単行本が 55 話 (40%)、読み聞かせ物語集が 1 話 (1%)、漫画本が 1 話 (1%)、雑誌が 25 話 (18%)、紙芝居が 1 話 (1%)、パンフレットが 2 話 (1%) 存在する。昭和期と比較すると平成期においては、読み聞かせ物語集が圧倒的に増加していることがわかる。一方、文字が主体の単行本や児童向け雑誌での収録は減少傾向にある。読み聞かせ物語集が増加傾向にある要因は、子どもの読書に関する国の文教政策が考えられる。1992(平成 4)年 4 月 7 日に児童文学作家で当時参議院議員であった肥田美代子が、参議院文教委員会で子どもの本や読書、学校図書館における司書教諭の在り方について発言した<sup>2</sup>。このことがきっかけとなり、1997(平成 9)年 6 月に学校図書館法の一部が改正され、司書教諭の配置が義務付けられる。その後 2014(平成 26)年 6 月に学校図書館法が改正され、法律で「学校司書」が規定される。学校における子どもの読書活動を推進する「人」の存在の必要性が明確にされたのである。また 2000 年(平成 12)年には「子ども読書年」が実施される。これも肥田が当時の国務大臣鳩山邦夫に提案したものである<sup>3</sup>。同年 5 月には国際子ども図書館が開館する。2001(平成 13)年 12 月には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定される。この法律の第 6 条においては「父母その他の保護者は、子どもの読書活動の機会の充実及び読書活動の習慣化に積極的な役割を果たすものとする」とあり<sup>4</sup>、保護者に子どもの読書活動推進の役割を果たすよう促している。第 10 条においては「国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高める」ために<sup>5</sup>、4 月 23 日を「子ども読書の日」と定めている。さらに「読書ボランティア」という名称が生まれ<sup>6</sup>、読み聞かせやお話会が盛んになっていく。その活動の成果であろう。小学生、中学生、高校生を対象にした全国学校図書館協議会の調査では、読書率は 2002(平成 14)年から上昇傾向にある<sup>7</sup>。2005(平成 17)年 7 月には「文字・活字文化振興法」が成立し、同月 29 日に施行される。これは「2001 年(平成 13)12 月 12 日に制定された『子どもの読書活動推進法』とあわせて考えると、まさに、全国民への読書活動推進の法律ができた」といえる<sup>8</sup>。子どもだけでなく、大人にも読書活動を推奨しているのである。このように平成期は、法律において学校や家庭で読書活動の推進が規定され、教員や司書(学校、公共図書館)、読書ボランティア、保護者などにより読書活動が広められていく。子どもたちの読書活動推進のためや、家庭で保護者が子どもに読み聞かせるためや、大人にも読書に親しんでもらうために、多くの読み聞かせ物語集が出版されたのである。

一方、児童向け雑誌での収録が減少している原因は、学年別学習雑誌が休刊したことであろう。とくに昭和期の「ヘンゼルとグレーテル」は、幼児向けの雑誌や学年別学習雑誌での収録が多く、「お菓子の家」や「おかしのうち」の題名で改変されたものが多かった。出版社では小学館と講談社が挙げられるが、小学館が 1922(大正 11)年に創刊した学年別学習雑誌は、平成期になると相次いで休刊となる。講談社の学年別学習雑誌は昭和期に創刊され、数年で休刊となったため平成期には存在しない<sup>9</sup>。また平成期には、グリム童話の全訳本が 6 種類出版されたにもかかわらず、文字が主体の単行本は減少する。文字だけでなく、子どもたちが興味をもつよう挿絵を入れた図書に変わり、「ヘンゼルとグレーテル」は幼い子ども向けの話になっていく。

次項では出版形態ごとに改変された話を取り上げてその内容を紹介する。

## 2. 出版形態の改変点

## 1) 出版形態別改変点について

## (1) 絵本における改変について

平成期の絵本は29話〔1 4 7 8 12 13 16 17 20 22 24 25 27 31 39 47 55 56 58 59 60 63 65 68 78 81 85 100 102〕確認している。母親は29話中22話が継母で、4話が実母である。3話は母親の存在がない。子捨ては26話で実施される。魔女は29話中26話、「魔法使い」は2話、「怪獣」は1話である。「パンの家」は5話、「お菓子の家」は22話、「不思議な家」と「菓子パンの家」は各1話ずつある。宝物略奪は23話で、鳥が救助する話は19話あり、そのうちグレーテルが救助者として現れた鳥に「重すぎるからひとりずつ渡して」という言葉が存在するのは5話である。母親が死亡する話は20話で、生存もしくは記述のないものは9話である。9話のうち「家出する」話が2話、「父親に追い出される」話が1話存在する。

特徴としては、ハンディタイプのアニメ絵本が6冊出版されていることである。昭和期にはサンリオが『サンリオ名作アニメランド8 ヘンゼルとグレーテル』(1987)を330円の価格で出版している<sup>10</sup>。これは子ども向けに販売された「ヘンゼルとグレーテル」の最初のハンディタイプのアニメ絵本である。ここでは平田昭吾が著した『よいことママのアニメ絵本 ヘンゼルとグレーテル』(1989)〔8〕を取り上げてその内容を見ていく。母親は意地悪な継母で、インフレで食べ物がなくなり子捨てを提案する。子捨ては1回で、森ではヘンゼルはカブトムシを発見して喜び、グレーテルは花のネックレスを作る。2人は森の動物たちに囲まれて楽しく過ごす。その後2人はお菓子の家を見つけてお菓子を食べるが、魔女に見つかり捕らえられる。ヘンゼルは檻に入れられ、グレーテルは家事を手伝わされる。2人は「きっと死んだお母さんが守ってくれる」と励まし合う。グレーテルは機転を利かして魔女を籠に入れるが、焼死させたとは書かれていない。2人は宝物を略奪し、川を渡れず困っていると白鳥が現れる。白鳥は「私にお乗りなさい」と言い、2人を助ける。この白鳥は天国にいる母親であるという設定である。帰宅すると継母は死亡しており、父親が出迎える。

話の筋は変わっていないが、子どもたちと母親の描かれ方に改変がみられる。親に捨てられた子どもたちが森で過ごす場面では、ヘンゼルは男の子らしさが、グレーテルは女の子らしさが強調されている。原典には「カブトムシ」や「花のネックレス」は出現しない。そして森にいる動物たちは、怖いどころか仲間として描かれている。「皆で仲良く遊ぼう」ということであろうか。作者の平田昭吾(1939-)は手塚治虫を師とするアニメ絵本作家であり「アニメ」という造語を世界で初めて使用した人物である<sup>11</sup>。彼は『「明るく、楽しく、ためになり、【図1】資料〔8〕平田昭吾作/高橋  
思いやりの心を育てる』をモチーフに翻案したのがアニメ絵本です」 信也画 プティック社(1989)と語っており<sup>12</sup>、幼い読者の目線で創作していると主張している。



【図1】資料〔8〕平田昭吾作/高橋信也画 プティック社(1989)

また困難に遭うと2人は「天国の母」を思い出し、その母は白鳥となって登場し、2人を助ける。継母は悪い存在として描かれ、実母は子どもたちを見守る優しい存在として描かれている。

実際の児童虐待の統計では、虐待者は継母よりも実母の方が圧倒的に多い。厚生労働省が平成9年度から平成30年度までの主たる虐待者の推移を報告している<sup>13</sup>。それによると平成9年度の統計では、虐待をしているのは実母が55%、実父が27%、継母が3.8%、継父が9.1%である。実父母が全体の82%を占めており、継父母が約13%という結果である。平成30年度の統計では、虐待をしているのは実母が47%、実父が41%、継母が0.5%、継父が5.8%である。実父母が全体の88%を占めており、継父母が6.3%という結果である。平成期の終わり頃は、実の父親の虐待が増え、継父母の虐待が減少傾向にある。

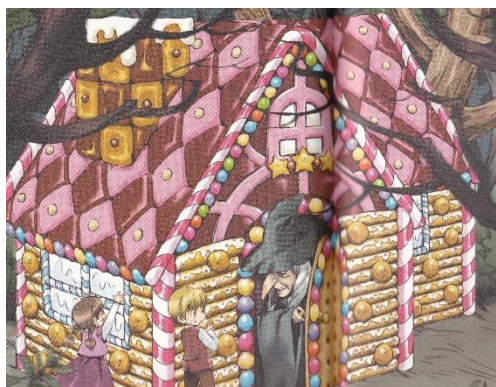
平田は原典どおりに「継母＝悪」というイメージを刷り込み、理想の母親像を描き出している。本のタイトルには「よいことママの」と記載されており、購買者の母親を意識したものと思われる。また魔女については焼死という表現を使用せず、読者の想像に任せている。絵本のあとがきには、「食物がなく子供を森にすてるという残酷な面を持つお話です。私達ももっと食物を大切にしなければいけませんよ」という教訓がある。幼い子どもと親に対する飽食の戒めを書き、「ためになる」絵本として購入されることを期待しているのであろうか。

平田は昭和期にも『テレビ名作アニメ劇場』(1975)というアニメ絵本で「ヘンゼルとグレーテル」を出版している。このアニメ絵本は「幼稚園から小学1・2年向」と記載されているが、ハンディタイプではない。平成期のアニメ絵本はハンディタイプ、419円という価格で販売されている。購入しやすく、持ち運びが簡単で、子どもたちがどこでも絵本に親しむことができるよう配慮されている。

## (2) 絵物語集における改変について

絵物語集は10話(6 19 28 48 74 80 94 101 103 105)確認している。母親は10話中5話が実母である。子捨ては10話で実施され、そのうち子捨てを提案するのは継母が5話、実母が3話、両親が2話である。両親が提案する2話の結末は、両親が生存しているかどうか明らかにされていない。魔女は10話中9話で、「魔法使い」が1話である。「パンの家」は2話のみで、「お菓子の家」が8話である。宝物略奪は9話あり、鳥が救助する話は6話で、そのうち救助者として出現する鳥の能力に対して、的確な判断を示すグレーテルの言葉が含まれている話は1話のみである。

ここでは『キラキラかわいいおんなのこのおはなし』(2013)80に収録された「ヘンゼルとグレーテル」を取り上げてその内容を紹介する。母親は実母で、子捨ては原典どおり2回行われる。森で迷子になった2人は、お菓子の家を見つける。お菓子の家には魔女がいて、2人を歓待する。その後ヘンゼルは檻に入れられ、グレーテルは料理を命じられる。魔女はヘンゼルを食べようとするが、グレーテルにより竈に入れられてしまう。2人は魔女の宝物を略奪し、家に帰宅するという内容である。話の筋は原典どおりであるが、鴨(家鴨)による救助と帰宅後の両親の様子が省略されている。一方、お菓子の家の場面は見開きいっぱいに描かれている【図2】。魔女を焼死させるグレーテルの勇敢さは描かれているが、鴨に救助される場面は省略されている【図3】。



【図2】資料80 藤田香絵『キラキラかわいいおんなのこのおはなし』ナツメ社(2013)



【図3】資料80 藤田香絵『キラキラかわいいおんなのこのおはなし』ナツメ社(2013)

## (3) 文字が主体の単行本における改変について

文字が主体の単行本は、24話(5 9 15 23 29 30 32 33 34 35 36 38 40 41 45 50 51 64 75 79 82 83 95 98)確認している。母親は24話中9話が実母である。子捨てはすべて実施されている。「魔

女」は24話中20話で、「魔法使い」が2話、「小さなお婆さん」が1話、女性の名前(カタリーナ)が1話である。「パンの家」は15話あり、「お菓子の家」が7話、「ケーキとパンの家」と「ジンジャークッキーの家」がそれぞれ1話である。宝物略奪は21話あり、鳥に救助されるのは14話で、そのうちグレーテルの的確な判断を示す言葉が存在するのは13話である。母親が死亡する話は22話で、そのうち「実家に戻る」途中で死亡する話が1話ある。

24話中9話は、全訳本やストーリーテリングの本で、原典に忠実な内容である。一方、「ヘンゼルとグレーテル」のパロディも出版されている。それは2010年に出版された『魔法つかい赤ずきんちゃん』<sup>64</sup>に収録されている「妹のサバイバル」である<sup>14</sup>。この話は、「ヘンゼルとグレーテル」の話に基づいて作成されたものである。冒頭は、兄妹がお菓子の家を見つける場面から始まる。兄妹には名前はない。2人は森に捨てられ迷子になる。妹は信じていた父親に失望し、頼りない兄を守ろうと決意する。そこへお菓子の家から魔女が現れる。魔女は虫歯のため甘い物は苦手だという。魔女はお菓子の家で獲物をおびき寄せようとするが、目が悪いため獲物を捕らえることができず、逆に熊に襲われてしまう。魔女は2人に助けを求める。兄は断り、妹は応じる。妹は生きていくためには大人が必要であることを痛感していたからである。魔女を熊から助けると、3人は家族のように暮らし始める。20年経過後、妹は大手菓子メーカーの社長になり、兄は歯医者になる。魔女は魔法を使うことなく、「おばあちゃん」と呼ばれ3人で暮らす。

この話の特徴は、妹が現実を見て状況を的確に判断できるということである。子どもたちは実の父親に裏切られ、継母には足手まといの存在として扱われる。妹は世の中の不条理を知り、親を見限り、生きるための糧を得ようと画策する。その結果、大人と家が必要であると痛感する。大人は魔女で、家はお菓子の家である。子どもたちは魔女を取り込み、家族として共に暮らす。その結果、子どもたちは幸福な生活を手に入れ、魔女は兄妹から「おばあちゃん」と呼ばれ平穏な生活を手に入れる。子どもたちは困難を克服し、魔女は介護をしてくれる家族を見つけたのである。

この話は、原典であるグリム兄弟の「ヘンゼルとグレーテル」を現代風に改変してパロディ化したものだが、あとがきには、グリム兄弟の「ヘンゼルとグレーテル」の短いあらすじも紹介されている。

#### (4) 読み聞かせ物語集における改変について

読み聞かせ物語集は、38話(2 3 18 21 37 42 44 46 49 52 53 54 57 61 62 66 67 69 70 71 72 73 76 77 84 86 87 88 89 90 91 92 93 96 97 99 104 106)確認している。読み聞かせ物語集は話を短縮したもので、聞き手の子どもはもちろんのこと、読み手の大人もいろいろな話に触れることができる。簡潔にするため省略されている箇所が多い。子捨てが実施されても1回のみのもものが16話で、魔女が子どもたちを家に招き入れて歓待する際に料理の記述がないものが12話で、記述されていても「ごちそう」「お腹いっぱい」という表現で済まされているものが21話である。母親は13話が実母である。原典では子捨てを実行するのが両親であるにもかかわらず、父親のみが森へ行く話が11話存在する。決定権は父親にあると考えられるが、読み手である母親を気遣った改変なのか、理由は不明である。また魔女を焼死させ、帰宅する際に救助する鳥(鴨・家鴨)が出現するのは22話である。そのうち8話は鴨や家鴨ではなく「白い鳥」、「白鳥」、「白い大きな鳥」である。その鳥に対して「重すぎるからひとりずつ」というグレーテルの的確な判断を示す言葉が存在しているのは『ママお話しかせて松谷みよ子かたりの昔話』(2002)<sup>44</sup>のみである<sup>15</sup>。文は高津美保子である。この本に収録されている「ヘンゼルとグレーテル」の話は原典に忠実である。高津は改変することなく、原典に忠実に訳している。魔女は32話で、「魔法使い」が5話である。子どもたちが見つける「パンの家」は

2話のみで、「お菓子の家」が34話、「パンとお菓子の家」が1話、「小さい家」が1話である。また子どもたちが家を見つける場面では、華やかに描かれているものが出現する。クッキーやケーキで作られた家がチョコレートやマカロンなどでトッピングされている【図4】。森全体がお菓子で埋め尽くされ、夢のある場所として描かれているのである。「ヘンゼルとグレーテル」の話は「お菓子の家」の話であるかのような印象を視覚的表現によって読者に植え付けている。



【図4】資料86 倉谷奈己制作  
『世界のどうわ』ナツメ社(2014)

#### (5) 漫画本における改変について

漫画本は、アニメーション演出家の樋口雅一(1946-)による『まんがグリム童話3 兄妹の絆と確執』に収録されている「ヘンゼルとグレーテル」1話43のみである。この漫画は原典にほぼ忠実なものであるが、グレーテルの的確な判断を示す言葉は省略されている。また「グリムなるほど百科」と名付けて、ドイツ文学翻訳家池田香代子の解説がある。その解説では、子捨ては合理的であったことや、子捨ての話を語ることで供養となることなどが記載されている。漫画という親しみやすい媒体で、グリム童話や、西洋中世の時代背景についての説明が入れられている。

#### (6) 雑誌における改変について

雑誌は『小学一年生』(1992)と『小学二年生』(1998)における2話(11 26)のみである。『小学一年生』では「ヘンゼルとグレーテル」の内容が書かれ、檻に入れられているヘンゼルを救出する迷路が入れられている。また森永製菓の協力でお菓子の家が見開き2面で大きく入れられている。『小学二年生』では「ヘンゼルとグレーテル」の話の内容が書かれ、お菓子の作り方が説明されている。いずれもお菓子が強調されているのである。

#### (7) 紙芝居における改変について

紙芝居は2話(10 14)で、童心社(1992)と教育画劇(1994)の出版のものである。童心社は鶴見正夫脚本、こさかしげる画であり、省略はあるものの話の筋は原典に忠実である。教育画劇は関修一作画であり、改変されている箇所がある。母親は継母ではなく実母である。お菓子の家の屋根はチョコレートで、煙突はケーキでできている。母親は死亡とは書かれておらず、「いない」と曖昧な表現にされている。2つを比較すると、教育画劇の方が聞き手の子どもたちに不安を与えないよう改変されているといえる。

### 3. 形態別改変についての分析と考察

#### 1) 改変の概観

昭和期と比較して大きく異なるのは、子どもたちが鳥に救助される時、グレーテルが的確に判断する言葉「重すぎるからひとりずつ」が削除されていることである。昭和期にはこの言葉は43話(31%)存在していたが、平成期には20話(19%)に減少する。つまり女の子の賢さが省略されているのである。それぞれの出版形態において検討すると、この省略が一番多いのは、読み聞かせ物語集で21話(55%)



である。次が絵本 15 話(52%)、絵物語集 5 話(50%)、文字が主体の単行本 1 話(4%)の順である。漫画本 1 話、雑誌 1 話、紙芝居 1 話に省略されている。1 番多く省略されている読み聞かせ物語集については 3.3) で詳述する。また昭和期には「魔法使い」という表現が 138 話中 73 話(53%)あり過半数を占めていたが、平成期には 106 話中「魔法使い」は 11 話(10%)で、「魔女」は 92 話(87%)となる。それぞれの出版形態において「魔女」の出現率が高いのは、絵本 26 話(90%)と絵物語集 9 話(90%)、読み聞かせ物語集 33 話(87%)、文字が主体の単行本 20 話(83%)の順である。漫画本 1 話、雑誌 2 話、紙芝居 1 話に「魔女」という表現が見られる。出現率では、文字が主体の単行本よりも絵本や絵物語集の方が高い。これにより「魔女」という言葉が幼い子どもに定着していることが読み取れる。また子どもたちが見つける「パンの家」は、106 話中 76 話(72%)が「お菓子の家」である。昭和期の「お菓子の家」の出現率は 138 話中 95 話(69%)であったので、平成期も昭和期同様「お菓子の家」という表現が増えている。それぞれの出版形態において「お菓子の家」の出現率が高いのは、読み聞かせ物語集 34 話(89%)、絵物語集 8 話(80%)、絵本 22 話(76%)、文字が主体の単行本 7 話(29%)の順である。漫画本 1 話、雑誌 2 話、紙芝居 2 話は「お菓子の家」という表現である。さらに原典では子どもたちが帰宅したとき母親は死亡しているが、「家出する」「実家に戻る」「父親に追い出される」という表現が平成期に出現する。母親が「家出する」話は絵本 2 話、「実家に戻る」話は文字が主体の単行本 1 話、「父親に追い出される」話は絵本 1 話である。これらの現象をもたらした原因について、次項で考察していく。

## 2) 平成期にみられる現象の理由について

### (1) グレーテルの発言の削除について

子どもたちが森から帰宅するとき鳥に救助される場面で、グレーテルの発言が削除されているのは、女の子の賢さを示す表現が伝えられておらず、あたかも女性が危機の際に的確な判断ができる存在であることを明記したくないかのような印象を受ける。

2.1) (1) で述べた平田昭吾の絵本においては、ヘンゼルはカブトムシで遊び、グレーテルは花のネックレスを作るように、「男の子らしさ」と「女の子らしさ」が加筆されている。この絵本は、初版から 21 年経過した 2010(平成 22)年には 37 刷発行され、現在(2022 年)では電子書籍化されており、多くの人びとに購読されていることがわかる。ほかにも平成後期には、絵物語集で取り上げた『キラキラかわいいおんなのこのおはなし』のように書名に「女の子」と記載されている本や、「男の子」を対象とした同種の本が出版される<sup>16</sup>。昭和期には「少年少女」と名付けられた文学全集が数多く出版されたが、平成期には「女の子らしさ」、「男の子らしさ」を強調する本が数多く出版されるのである。

「ヘンゼルとグレーテル」の話が収録されているのは、「女の子」を対象とした本のみである。それらの本には、グレーテルの発言は存在しない。

「ヘンゼルとグレーテル」の話は、昭和期には文字が主体の単行本がもっとも多く 4 割、絵本が 3.1 割、雑誌が 1.8 割、読み聞かせ物語集が 1 話のみという状況であった。平成期になると、読み聞かせ物語集がもっとも多く 3.6 割、絵本が 2.7 割、文字が主体の単行本が 2.3 割という状況になる。つまり、平成期は子どもの本に注目が集まり、読書の大切さが再認識された時代なのである。しかしその内容を確認すると、手放しで喜ぶわけにはいかない。なぜなら、もっとも出版数が多い読み聞かせ物語集は、改変された内容で昔話を収録しているからである。西洋昔話に含まれている子どもの成長、とくに女の子の成長が感じられる「グレーテルの的確な発言」を削除するという改変が行われているのである。労働によって養われた能力によって、女の子が男の子より逞しく、賢く、思いやりのある人間に成長したことがわかる発言が削除されているのは問題といえよう。削除せず原典通り収録され

ている本も存在するが、それらは主として単行本や絵本である。平成期に出現する読み聞かせ物語集においては、38話中37話において「グレーテルの発言」が削除されている。昭和期にはこの発言は138話中43話(31%)存在していたが、平成期には106話中20話(19%)に減少し、そのことが顕著に表れるのが、読み聞かせ物語集である。紙面の都合による削除とも考えられるが、女の子の賢さを感じられる発言を省略するのはいかなるものであろう。「ヘンゼルとグレーテル」は、昔話のなかでも女の子のイニシエーションを描いている貴重な話である。平成期に数多く出版される読み聞かせ物語集において、女の子の成長を表す言葉が削除されているのである。

## (2) 魔女について

平成期になると「魔女」が定着するのは、子ども向けに「魔女」を主人公とする話が提供されているからだを考える。角野栄子は『魔女の宅急便』(1985-2009)を、あんびるやすこは『なんでも魔女商会』(2003-)をシリーズで出版している。これらは学校図書館や公共図書館で所蔵されているものだ。1989年7月にはジブリ映画『魔女の宅急便』が公開される。1999年には東映アニメーション『おジャ魔女どれみ』が放映される。子どもたちは本や映画、テレビなどで「魔女」という言葉が身近なものとなり、「魔法使い」よりも認識度が上がったものと思われる。

## (3) お菓子の家について

森で子どもたちが見つける家は、原典では「パンの家」であるが、昭和期から「お菓子の家」という表現が増加し、平成期になるとさらに増える。昭和期はビスケット、チョコレート、キャンディなどの絵が描かれていたものが多かったが、平成期はマカロンやケーキなどが本物そっくり立体的に描かれるようになる。平成期には「スイーツ」という言葉が流行し、「スイーツ男子」という言葉が生まれたほど<sup>17</sup>、さまざまな菓子がメディアで紹介されるようになる。それに伴い、子どもたちの菓子文化が豊かになり、主食としてのパンではなく菓みに焦点が置かれるようになったと考えられる。

## (4) 母親の結末について

平成期の母親の結末に着目すると、継母が「家出する」話が2話(12 13)、「実家に戻る」話が1話(50)、「父親に追い出される」話が1話(60)出現する。これらの表現は平成期の特徴といえる。日本の作品は13のみであり、継母が「家出する」唯一の作品である。50はイギリスの作家による改変で、60はイタリアの作家による改変である。ここでは平成期最初に出版された「家出する」母親について述べる。それは、ワンダ・ガアグ再話/佐々木マキ訳・絵『ヘンゼルとグレーテル』(1993)12である。原典は1936年に出版された *Tales from Grimm* である<sup>18</sup>。この話の母親の最後の記述は、「ヘンゼルとグレーテルが、永久にかえってきそうにないと思われたとき、この女は、じぶんの夫がねてもさめても、いなくなった子どもたちのことばかり、かんがえていることに気づきました。女は、そのことに、ひどくはらをたてて、大きな赤いハンカチにじぶんのものをつつむと、家を出ていってしまったのです」である<sup>19</sup>。継母は死亡することなく、子どもたちに嫉妬し自ら家族の縁を断ち切ったのだ。彼女は、邪魔な子どもがいなくなり、夫婦2人きりになっても夫の愛情を取り戻すことができなかったことに失望したのである。父親の子どもへの想いだけでなく、夫の妻への想いについても描いている。つまり親子間だけでなく、夫婦間の問題も描き出している絵本が平成期には出版されているのである。

## 3) 読み聞かせ物語集について

ここでは平成期に多く出版され改変が多くみられる読み聞かせ物語集について述べる。これは児童文学者の西本鶏介(1934-)や千葉幹夫(1944-)、心理学者の田島信元(1946-)の著作(監修)によるものが目立つ。西本は昭和期にハンディタイプの『世界昔話集 一日一話五分間のお話』(1973)を出版している<sup>20</sup>。それまでに「一日一話」という語句を用いた本は出版されているものの、世界の昔話を集めたハンディタイプの本は斬新なものと受けとめられた。西本は平成期に出版された多くの児童書で「読み聞かせ」について次のように解説している。「家を守り、子どもを育てる母親の心をそなえた昔話がグリム童話」であり<sup>21</sup>、「母親の語りには、わが子への愛情がたっぷりこめられています。子どもを喜ばせるテクニックがあります」と述べている<sup>22</sup>。彼はグリム童話の魅力を伝え、母親に心のこもった読み聞かせを勧めているのである。2011年に千葉幹夫は親と子の楽しく充実した時間を強調し<sup>23</sup>、田島信元は読み聞かせが親子の絆を強め子どもの読書活動の育成につながると述べている<sup>24</sup>。彼らは本の解説で、「読み聞かせ」により親子の絆づくりを勧めていたのである。それでは「読み聞かせ」という語句はいつごろから定着したのであろうか。読書運動家の増村王子(1913-2003)が『『よみきかせ』』ということばが一般化し定着してきたのが、ごく最近だ」と記しているのは、1983(昭和58)年2月のことである<sup>25</sup>。地域性の違いで一概にはいえないが、増村によると「よみきかせ」はすでに昭和期に定着しており、「よみきかせ」が広まった要因は、1960年に鹿児島県立図書館長であった椋鳩十(実名:久保田彦穂 1905-1987)が主唱した「母と子の二十分間読書運動」にあるという<sup>26</sup>。その後、1968(昭和43)年に日本子どもの本研究会が集団の読み聞かせの試演を行った<sup>27</sup>。椋鳩十の読書運動は母親と子どもとの1対1の読み聞かせであった。母親が子どもに、または子どもが母親に対して本を読む活動である。日本子どもの本研究会が提唱した運動は、親子間だけでなく大勢の子どもたちが集まって話を共有する形式で行われたのである。このように読み聞かせは昭和期に広がりを見せていたが、平成期になると「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001)が制定されたので、ますます広がりを見せるようになったのである。また、小学校1年生の国語の教科書(光村図書出版 平成23年度版)において、「むかしばなしがいっぱい」という単元では、日本と外国の昔話における登場人物のイラストがカラーで描かれており、そこには話の題名が記載されていない<sup>28</sup>。子どもたちはイラストを見て、それがどの昔話であるのかを考えるよう設定されている。しかし家庭でこの単元の昔話をすべて読むのは至難の業である。そこで1冊に多くの昔話が収録された読み聞かせ物語集が普及したのではないだろうか。平成期後半から多く出版されたのは、教科書による影響も一因と考えられる。また読み聞かせ物語集には、魔女を焼死させたことを明らかにしていないものや、宝物を略奪する子どもの行為が省略されているものも目立つ。これらは教育的な判断によるものであろう。

## おわりに

2012(平成24)年は『グリム童話』刊行200年記念の講演会やシンポジウムがなされ、グリム童話が注目された年である。しかし平成期の「ヘンゼルとグレーテル」は、話が短縮され、女の子の賢さが削除されているものが多い。また子捨ての話よりお菓子の家を強調した話に変わっているものが続出する。子どもたちが不安を抱かないよう改変して提供しているといえる。最後には母親が「家出する」「実家に戻る」「父親に追い出される」という表現も出現する。親子の関係だけではなく、夫婦の在り方が児童書のなかに組み入れられているのである。

平成期には昭和期からの読書推進活動が実を結び、法律により読書環境が整えられた。学校図書館法が改正され、学校においては本と子どもを結ぶ「人」の存在が確立された。家庭においては保護者

に子どもの読書活動を推進する役割が促された。学識者は読み聞かせを勧めることで親子の絆を深めようとした。学校や家庭で読書に親しませることに重点を置くようになったのである。その結果、2002(平成14)年からは子どもの読書率は上昇し好転するようになる。このように平成期は子どもの本に注目が集まり、読書が見直された時代である。しかしそこには改変された読み聞かせ物語集が多く存在し、本来のテーマが失われているのである。

## 【資料】

年	月	作者(文・訳・絵)	タイトル	出典	出版社
1	1989	東龍博文/秋元純子絵	ヘンゼルとグレーテル	音楽のえほん 11	岩崎書店
2	1989	2 スタジオパフ文/童公佳他絵	へんぜるとぐれーてる	3さいの本 1おはなし	講談社
3	1989	3 宮中雲子文	ヘンゼルとグレーテル	読みきかせグリム名作劇場20話	小学館
4	1989	3 ガルル倶楽部構成・文/日本アニメーション制作	ヘンゼルとグレーテル	ケイブンシャの大百科別冊アニメ版名作えほん1	勁文社
5	1989	4 小澤俊夫他訳	兄と妹	ドイツ・ロマン派全集 15巻	国書刊行会
6	1989	10 間所ひさこ文/パッテスタ絵	ヘンゼルとグレーテル	世界こども名作13 学研・ファブリ国際共同編集版	学習研究社
7	1989	11 大島かおり訳/たむらしげる絵	ヘンゼルとグレーテル	ミキハウスの絵本	三起商行
8	1989	12 平田昭吾文/高橋信也絵	ヘンゼルとグレーテル	せかいめいさくシリーズ38	ブティック社
9	1991	10 佐々梨代子、野村法訳	ヘンゼルとグレーテル	子どもに語るグリムの昔話3	こぐま社
10	1992	5 鶴見正夫脚本/こさかしげる画	ヘンゼルとグレーテル	世界の名作第2集 紙芝居	童心社
11	1992	10 あむやまざき製作/大中美智子絵	おかしなおかしなおかしのおうち	小学一年生48(7)	小学館
12	1993	4 ワンダ・ガアグ再話/佐々木マキ訳・絵	ヘンゼルとグレーテル	世界傑作童話シリーズ	福音館書店
13	1993	10 飯島敏子文/景山ひとみ絵	ヘンゼルとグレーテル	日本と世界のおはなし	ひかりのくに
14	1994	6 関修一作画/山口いつ子美術	ヘンゼルとグレーテル	紙芝居	教育画劇
15	1994	11 北川幸比古文	ヘンゼルとグレーテル	こどものための世界の名作	世界文化社
16	1994	不明 豊村悦子編/寺下翠絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル/まぬけのハンス(みかど名作童話11)	みかど商事
17	1995	7 早野美智代文/森津和嘉子画	ヘンゼルとグレーテル	名作絵本12	小学館
18	1995	7 早野美智代文/平きょうこ絵	ヘンゼルとグレーテル	一日一話読み聞かせ おはなし366 後巻	小学館
19	1996	5 西本鶏介文/スズキコージ絵	ヘンゼルとグレーテル	21世紀幼稚園百科22 おはなし名作編	小学館
20	1996	10 木暮正夫文/小松修絵	ヘンゼルとグレーテル	世界名作えほんライブラリー	フレーベル館
21	1996	11 西本鶏介文/いもとようこ絵	ヘンゼルとグレーテル	子どもとお母さんのお話 世界のお話	講談社
22	1996	不明 ジョナサン・ラングレー作/絵	ヘンゼルとグレーテルのおはなし	とびだししかけえほん	大日本絵画
23	1997	5 吉原高志、吉原素子訳	ヘンゼルとグレーテル	初版グリム童話集1	白水社
24	1997	7 柳川茂文/宮尾岳絵/照沼まりえ脚色・構成	ヘンゼルとグレーテル	世界名作アニメ絵本シリーズ3	永岡書店
25	1997	11 天沼春樹訳/飯田正美絵	ヘンゼルとグレーテル	絵本グリムの森2	パロル舎
26	1998	3 黒川和彦編	ヘンゼルとグレーテルのおかしなおうち	小学二年生53(12)	小学館
27	1998	4 平田昭吾文/高橋信也絵	ヘンゼルとグレーテル	世界名作ファンタジー36	ポプラ社
28	1999	1 乾侑美子文/ふりやかよこ絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話16 小学館世界の名作	小学館
29	1999	6 西本鶏介文/藤田新策絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話 こどもと大人のためのメルヘン	ポプラ社
30	1999	6 関啓吾、川端豊彦訳	ヘンゼルとグレーテル	完訳グリム童話 I さようなら魔法使いのお婆さん(角川文庫)	角川書店
31	1999	8 小澤俊夫文/村上勉絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル・こびとのくつや(えほん世界のおはなし15)	講談社
32	1999	9 天沼春樹編著	ヘンゼルとグレーテル	子どものころ読んだおとぎ話37選	東京書籍
33	1999	10 野村法訳	ヘンゼルとグレーテル	完訳グリム童話集 決定版	筑摩書房
34	2000	6 乾侑美子訳	ヘンゼルとグレーテル	1812初版グリム童話上巻	小学館
35	2000	7 池田番代子訳/オットー＝ウッペローデ画	ヘンゼルとグレーテル	完訳クラシックグリム童話 1	講談社
36	2000	10 齋藤チヨ著	ヘンゼルとグレーテル	親と子の心をつなぐ世界名作おはなし玉手箱	鈴木出版
37	2000	10 西本鶏介編著/狩野富貴子絵	ヘンゼルとグレーテル	幼児のためのよみきかせおはなし集1	ポプラ社
38	2001	3 齊藤洋著	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話三年生	借成社
39	2001	5 矢川澄子再話/井上洋介絵	ヘンゼルとグレーテル	絵本・グリム童話	教育画劇
40	2001	7 大庭みな子著	ヘンゼルとグレーテル	絵本・新編グリム童話選	毎日新聞社
41	2001	11 フローチャー美和子訳	男の子と女の子のきょうだい(口伝え)	初版以前グリム・メルヘン集	東洋書林
42	2002	3 ささきたづこ文/牧野鈴子絵	ヘンゼルとグレーテル	決定版2歳からはじめるよみきかせ絵本 世界の名作	講談社
43	2002	4 樋口雅一著	ヘンゼルとグレーテル	まんがグリム童話3巻兄妹の絆と確執	講談社
44	2002	4 高津美保子文/広野多珂子絵	ヘンゼルとグレーテル	ママお話しさせて 松谷みよ子かたりの昔話	小学館
45	2002	10 フェリクス・ホフマン編・画/大塚勇三訳	ヘンゼルとグレーテル	グリムの昔話1(福音館文庫)	福音館書店
46	2003	4 矢部美智代文/金井正宏絵	ヘンゼルとグレーテル	おともだちよみきかせえほん世界名作30話	講談社
47	2004	3 北川美瑛他編/すずきひろこ絵	ヘンゼルとグレーテル	はじめてのめいさくしかけえほん33	学習研究社
48	2004	3 ささきたづこ文/上野紀子絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム絵本館	講談社
49	2004	7 西本鶏介文	ヘンゼルとグレーテル	世界の昔話 5分間読み聞かせ名作百科	学習研究社
50	2004	10 ルース・マンガ＝サング＝ス著/西本鶏介訳	ヘンゼルとグレーテル	魔女の本 世界の民話館	ポッキング
51	2004	12 パーリー・ドハティ著/神戸万知訳	ヘンゼルとグレーテル	フェアリーテイル 絵巻物語	原書房
52	2005	2 神山和子文/山田静子絵	ヘンゼルとグレーテル	こどもがよろこぶおはなし50	フレーベル館
53	2005	11 千葉幹夫編著	ヘンゼルとグレーテル	よみきかせおはなし名作2グリム童話	成美堂出版
54	2005	12 クリスティーン・アリソン編著/高橋啓訳	ヘンゼルとグレーテル	365日のベッドタイムストーリー	飛鳥新社
55	2006	11 パーナデット・ワッツ文/絵 福本友美子訳	ヘンゼルとグレーテルのおはなし	グリム絵本	BL出版

	年	月	作者(文・訳・絵)	タイトル	出典	出版社
56	2007	3	寺村輝夫文/永井郁子絵	ヘンゼルとグレーテル	世界名作おはなし絵本	小学館
57	2007	6	立原えりか文/川上和生絵	ヘンゼルとグレーテル	グリムおはなし絵本 3歳から親子で楽しむ本	主婦と生活社
58	2009	2	那須田淳訳/北見葉胡絵	ヘンゼルとグレーテル	絵本・グリム童話1	岩崎書店
59	2009	6	シンシア・ライラント文/ジェン・カラーチー絵/水野るり子訳	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	新樹社
60	2009	9	ロバート・ビグミン文/アナ・ウグーカト絵/関口英子訳	ヘンゼルとグレーテル	世界の名作えほんシリーズ	西村書店
61	2009	10	千葉幹夫編著/池田明子絵	ヘンゼルとグレーテル	母と子のおやすみまえの小さなお話365	ナツメ社
62	2010	1	矢野美智代文	ヘンゼルとグレーテル	語りかけ絵本3さいの本 世界のおはなし	講談社
63	2010	3	藤本朝己訳/カトリーン・ブランド絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム兄弟の童話から	平凡社
64	2010	6	柏葉幸子作/岡本順絵	妹のサバイバル	魔法つかい赤ずきんちゃん(夢をひろげる物語8)	ポプラ社
65	2010	7	遠田潔編/つじむらあやこ絵	ヘンゼルとグレーテル	はじめてのめいさくしかけえほん33	学研教育出版
66	2010	10	桜井正明文/浅倉由美子絵	ヘンゼルとグレーテル	名作よんでよんでグリムどうわ	学研プラス
67	2010	11	泉名文子文/仁科幸子絵	ヘンゼルとグレーテル	母と子の読み聞かせ世界のお話120 ママおはなしきたいな	ナツメ社
68	2011	1	こわせたまみ文/松浦由美子制作	ヘンゼルとグレーテル	ころころえほん	フレーベル館
69	2011	3	天野勢津子他文/モリアート絵	ヘンゼルとグレーテル	子どもが眠るまえに読んであげたい365のみじかいお話	永岡書店
70	2011	9	千葉幹夫編著/重森千佳絵	ヘンゼルとグレーテル	ママおはなしよんで 幼子に聞かせたいおやすみまえの365話から一版	ナツメ社
71	2011	10	山本和子文/タバサナオミ人形制作	ヘンゼルとグレーテル	おいしいめいさくたからばこ	学研教育出版
72	2011	11	立原えりか文/立本倫子絵	ヘンゼルとグレーテル	母と子の読み聞かせえほん 女の子の心をはぐくむ名作	ナツメ社
73	2011	11	西本鶏介編著/狩野富貴子絵	ヘンゼルとグレーテル	世界のおはなし全30話 よみきかせおはなし集ベスト30	ポプラ社
74	2012	5	ささきあり文/花珠絵	ヘンゼルとグレーテル	おんなのこのめいさくえほん ゆめいっぱいみんなプリンセス	西東社
75	2012	6	西本鶏介文・編	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話 (ポプラポケット文庫)	ポプラ社
76	2012	9	PHP研究所編	ヘンゼルとグレーテル	考える力を育てるお話366	PHP研究所
77	2012	12	千葉幹夫編著/原ベコリ絵	ヘンゼルとグレーテル	母と子の心がふれあう名作のきらめき365話	ナツメ社
78	2013	1	葉師夕馬文/室井ふみえ絵	ヘンゼルとグレーテル	せかいめいさくアニメえほん10	河出書房新社
79	2013	2	ウィルヘルム菊江訳/リディア・ポストマ絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話集 新装版	西村書店
80	2013	4	立原えりか著/藤田香絵	ヘンゼルとグレーテル	キラキラかわいいおんなのこのおはなし	ナツメ社
81	2013	6	いもとようこ文・絵	ヘンゼルとグレーテル	ヘンゼルとグレーテル	金の星社
82	2013	7	佐々梨代子・野村法訳/ハンス・フィッシャー絵	ヘンゼルとグレーテル	メルヘンビルダー	こぐま社
83	2013	8	橋本孝・天沼春樹訳/シャルロット・デマトーン絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話全集	西村書店
84	2014	6	夢姫文/たちもとみちこ絵	ヘンゼルとグレーテル	名作絵本きょうのおはなし1	第三文明社
85	2014	8	たかせかつゆき文/ヲバラトモコ絵	まよいのもりとおかしのいえ	ウルトラかいじゅう絵本	あいうえお館
86	2014	11	早野美智代著	ヘンゼルとグレーテル	世界のどうわ 母と子のおやすみまえのぬくもりの絵本	ナツメ社
87	2014	12	いしいいくよ他著	ヘンゼルとグレーテル	やさしい思いやりの心をはぐくむ女の子のお話	ナツメ社
88	2015	3	千葉幹夫著/上原ユミ絵	ヘンゼルとグレーテル	グリムどうわ 母と子のおやすみまえの小さな絵本	ナツメ社
89	2015	6	童夢編	ヘンゼルとグレーテル	ころころ育てるおはなし101	高橋書店
90	2015	7	小川こころ文/松野和貴絵	ヘンゼルとグレーテル	ココロが育つよみきかせ絵本世界のどうわ名作50選	東京書店
91	2015	8	林志保文/高藤純子絵	ヘンゼルとグレーテル	ポケット版考える力を育てるお話100	PHP研究所
92	2015	11	舟橋愛文/斉藤きよみ絵	ヘンゼルとグレーテル	ころころ育てるお話90 0歳~6歳よみきかせ	東京書店
93	2015	12	芹澤健介文/クレーン謙絵	ヘンゼルとグレーテル	考える力を伸ばす!心を育てる!読み聞かせ366	新星出版社
94	2016	4	間所ひさこ再話/松村真依子絵	ヘンゼルとグレーテル	教科書にでてくるせかいのむかし話2	あかね書房
95	2016	11	安東みさえ文/100%ORANGE絵	ヘンゼルとグレーテル	グリム童話 ポプラ世界名作童話15	ポプラ社
96	2016	12	西東編集部編	ヘンゼルとグレーテル	心をはぐくむてのひら名作えほん	西東社
97	2017	2	小学館編	ヘンゼルとグレーテル	心やさしく賢い子に育つみじかいおはなし366 おはなしPINEO	小学館
98	2017	3	多和田葉子著/牧野千穂絵	ヘンゼルとグレーテル	暗黒グリム童話集	講談社
99	2017	6	小川こころ文	ヘンゼルとグレーテル	ココロが育つよみきかせ絵本 グリムどうわ50選	東京書店
100	2017	11	小森香折文/吉田尚令絵	ヘンゼルとグレーテル	ひきだしのなかの名作	フレーベル館
101	2018	2	市川宣子文/シロシオ絵	ヘンゼルとグレーテル	3つのごちそう ランドセル名作	学研プラス
102	2018	3	中脇初枝文/高野登絵	ヘンゼルとグレーテル	はじめての世界名作えほん22	ポプラ社
103	2018	11	南谷佳世編/高山良策人形	ヘンゼルとグレーテル	こどもめいさくげきじょう 世界のおはなし21話	学研プラス
104	2018	12	ナツメ出版企画編	ヘンゼルとグレーテル	生きる力を楽しく育てる小さなお話365	ナツメ社
105	2019	3	小澤普ばなし研究所再話/あべななえ絵	ヘンゼルとグレーテル	読んでおきたいお話 小学1年	成美堂出版
106	2019	3	虎頭恵美子文/杉田香利絵	ヘンゼルとグレーテル	4さいの世界と日本の昔ばなし 考える力が育つ絵本	世界文化社

- 拙著博士論文「日本における『ヘンゼルとグレーテル』の受容—明治期から昭和期まで—」梅花女子大学大学院 2022年3月 1-2頁。
- 『第123回国会参議院文教委員会会議録』4号 1992年4月 11頁。
- 同上。
- 文部科学省「子どもの読書活動の推進に関する法律」子どもの読書活動推進ホームページ <https://www.mext.go.jp/> (閲覧日 2022年7月27日)
- 同上。
- 竹内哲『生きるための図書館』岩波書店 2019年6月 72頁。
- 「過去31年の学校読書調査結果の推移 1991年~2021年」全国学校図書館協議会 <https://www.j-sla.or.jp/> (閲覧日 2022年8月18日)

- 
- 8 『50年史』編集委員会編『日本雑誌協会日本書籍出版協会50年史』日本雑誌協会 2007年11月 207頁。
- 9 野上暁『小学館の学年誌と児童書』論創社 2015年8月 210頁。
- 10 立原えりか文/サンリオアニメスタッフ絵『サンリオ名作アニメランド8ヘンゼルとグレーテル』サンリオ 1987年11月。
- 11 平田昭吾、根本圭介他『日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ 手塚治虫と6人』ブティック社 2005年12月 256頁。
- 12 同上 260頁。
- 13 母子愛育会愛育研究書編『日本子ども資料年鑑2021』KTC中央出版 2021年2月 221頁。
- 14 【資料】64 129-147頁。
- 15 【資料】44。
- 16 ささきあり『おとこのこのめいさくえほん』西東社 2013年6月、西本鶏介編『強くやさしい心が育つ!男の子に贈りたい名作』PHP研究所 2014年10月などが出版されている。
- 17 米川明彦『平成の新語・流行語辞典』東京堂出版 2019年7月 414-415頁。
- 18 Gág, Wanda: *Tales from Grimm*. New York: Coward McCann 1936.
- 19 【資料】12 36-37頁。Gág, Wanda, op. cit., 24. 原典は “When Hansel and Gretel seemed to be gone for good, the woman saw that her husband could think of nothing but his lost children. This made her so angry that she packed up her things in a large red handkerchief and ran away.”である。
- 20 西本鶏介『世界昔話集 一日一話五分間のお話』芸術生活社 1973年5月。
- 21 【資料】66 126頁。
- 22 同上 126-127頁。
- 23 【資料】70 16頁。
- 24 【資料】69 2頁。
- 25 増村王子「よみきかせのすすめ」『学校図書館』388号 全国学校図書館協議会 1983年2月 9頁。
- 26 同上 11頁。
- 27 同上 11-12頁。
- 28 宮地裕他『こくご一下 ともだち』光村図書出版 2010年3月 32-39頁。